アウトサイダー!!!

和みなり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アウトサイダー！！！

【Ｎコード】
Ｎ０７２５Ｋ

【作者名】
和みなり

【あらすじ】
魔法使いはいる。例え世界中の人々は知らなくても。確かに存在している。
これは自分の信念のために動くアウトサイダーのおはなしです。

プロローグ：老いた英雄と閃光とアレ（前書き）

更新は不定期なので次はいつになるのか分かりません。
説明はあまりしないとおもいます。ご了承ください。

プロローグ：老いた英雄と閃光とアレ

夜になると人は活発になる。夜の街へ繰り出すもの、友人と食事をするもの、はたまた仕事をするもの。

空を見上げた者はいたのだろうか。もし居たなら、今日は幸運だったかもしれない。

なんせ、鼻歌を歌う閃光が居たのだから。

―――――――――――――――――――――

「博士、実験の結果が出ました」
「ウム、そうか」
博士は助手からデータを受け取ると、
「フォーッフォッフォッフォッ、フォーッフォッフォッフォッ」
不適に笑った。感情が抑え切れないほど高ぶったらしい。これは何を言っても止まらないな、と助手達がうんざりしていると不意に警報が鳴った。
「何事じゃ」
「それが、何者かがこの基地の敷地内に侵入しました」
助手の声からは慌ただしさが伝わってくる。
「レーダーで探知できなかったか」
しかし、博士の声からは冷静という文字しか読み取れない。
「侵入者は音速以上の速さで近づいていたようです」

「博士、どうします？」
博士は”何ということじゃ”と言いながらも口元はニヤリとしていた。
「アレをだすぞ」
周りがどよめく。
「アレですか」
「アレはまだ実践経験を積んでいませんし、精神年齢に僅かながら不安が残ります。もう少し熟成させてからではないと・・・」
「黙れ」
室内がシーンと静まる。
「今ここが狙われたということはアレのことはもうばれておる。それに敵は”雷轟”の娘じゃろうて。警備兵じゃ相手にならん」
”雷轟”の名を口にした途端、またもやどよめきがおこる。
「この研究の成果をだすのにもいい機会じゃ。そろそろ上の連中も結果を気にしだしておるからの」
そして助手達に睨みを効かせる。
「準備をしろ」
助手達はアレの準備を始めた。クビを切られたくない。その一心で。

「さて、ここに英雄の伝説・最終章の開演を宣言する」

―――――――――――――――――――――

「さて、ここに英雄を殺した悪魔・序章の開演を宣言するわ」

第一話：下手な嘘（前書き）

戦闘はまだまだです。

追記：ちょっと改変しました

第一話：下手な嘘

日本というのは本当に素晴らしいと思う。
いや、あんた日本人だろとツッコまれたりするがアタシは日本生まれだがイギリス育ちだ。まあ、それはおいといて。
日本はいい。四季のおかげでいつ来ても美しい。これが任務じゃなかったらと何度も思ってしまう。

「あ～、休みほし～」
「ＪＥＮＥＲＡＲＵなのに何を言っているんだ、おい」
金髪碧眼、そして人形のように小柄な少女、と言ったら彼女は怒るが本当にそうなのだ。街を歩けば誰もが振り向くほどの可愛さを持っている。それは保証しよう。
「仕事を早く片付ければその分休みが増えるだろうが」
「まあ、そうなんだけどね、なんかボーッとしたかったの」
それは嘘。二人共わかっている。ただ平凡な日常を試したかっただけ。
「・・・つまんないね、これ」
「ああ」
それも嘘。つまらないわけじゃない。ただ、これを認めると自分達の居場所がなくなる、そう思ったから否定する。それだけのこと。
二人が沈黙を続けていると一人の男がこちらに来た。
「やあ、探したよ、お二人さん」
ピリピリした空気を一気に和ませる。
「今回の任務は？」
そう、日本に来たのはそのためだ。
「これを見て」
そう言って渡されたのは資料だ。内容は”特殊魔法の人工発現に

ついて”。
「任務はその研究所の破壊。簡単でしょ？」
場所の地図が渡される。
「こんなものは下の奴らに任せばいいんじゃないのか？」
それは正論である。ＪＥＮＥＲＡＲＵの仕事はもっと難しいのだ。
一研究所の破壊など簡単すぎる。
「それがそうもいかないんだな、これが。そこにいる博士がかの有名な英雄”Ｋｉｎｇ”なんだよ」
二人の目の色が変わる。戦士の証だ。
「まだ死んでなかったみたいだね。老いてもまだ歴史に名を刻もうとしているんだからすごいよね。まあ、こっちにしてみりゃはた迷惑だけどね」
「あのお爺さん、左遷されたと聞いていたけどこんなところにいたのね」
「あら、司ちゃんはお知り合い？」
「ええ、あちらにいたときちょっとね」
顔が一瞬悲しむが、すぐに戦士の顔になる。
「話を戻すね。任務は研究所の破壊。でも本当の狙いは違うんだ。本当はそこでＫｉｎｇがやっている研究に関するもの全てを持ち去ってほしいんだ。研究所の破壊に見せ掛けてね」
なるほどと、二人は頷いた。これはＪＥＮＥＲＡＲＵの仕事だと思った。
「まっ、作戦とか決まったら僕に言ってきてね。そこら辺うろついてるから。じぇね」
そういってこの場から立ち去った。
「なあ、一つ聞いていいか」
金髪碧眼の少女が聞いてくる。
「なに？ユネット」
「あんなのが上（トップ）にたって東アジア支部（ココ）は大丈夫か？」
「大丈夫じゃないわ」

笑いながらそういう。
「嘘が下手過ぎるわ」
黒真、あなたも悲しい瞳を…

岸谷黒真（きしたにまこと）は道化師だ。

第二話：覚悟ってご存知ですか（前書き）

この回書いてて思ったこと
話飛びすぎ！

何とか更新できました

第二話：覚悟ってご存知ですか

人はいつも何かと戦っている。それが人の運命であり、人の性質である。人は戦い続けることで生きることが出来るのである。

――――――――――――――――――――

「ぐわっ！」

アラム＝クールドは焦っていた。

「どーしたぁー、アランちゃん？」

目の前の澄んだ淡い緑の瞳をした女性は薄ら笑いを浮かべながらそう言った。

「もう終わりかぁー？」

「まだまだぁ」

「へへっ、そーこなくっちゃ」

そしてまた戦いが始まる。

素手対飛び道具という奇妙な戦いだが。

――――――――――――――――――――

「アラムも懲りないよね、これで今日二十一回目だよ」

「弱点の克服、したいんだろあいつは」
「でもさ、魔法の性質上、それは不可能に等しいよ」
「ああ、だがあいつは可能性がある限り、諦める男じゃない」
「まあ、そういうところがアラムっぽいんだけどね」
部屋には二人の戦いの音が木霊（こだま）する。

―――――――――――――――――――――

氷の塊が俺に向かって飛んでくる。が、このくらいは軌道がよめる。問題はそこじゃない。たまに紛れ込んでいる軌道が不規則なやつ、そいつが問題だ。
「おわっ！」
「ほらほらー、避けてるだけじゃ勝てないよー」
軌道が真っ直ぐなのと不規則なの、見分けがつかないがそれは関係ない。ようは俺の体をアクアに当てれば良いのだ。魔法の威力は十分。だが、俺の魔法はリーチが短すぎる。対してアクアの魔法のリーチは約１０ｋｍ。あの弾幕を掻い潜ることが俺にできるのか？いや、やらなければこの特訓に意味がない。俺の生きる意味が壊される。これは覚悟の問題だ。俺はやらなくちゃいけないんだ。
「アラムの覚悟はさ、複雑過ぎるよ」
まるでアラムの心を見透かしていたような口調でアクアが話す。
「もっと単純でいいんだよ」
その瞳はとても澄んだ淡い緑色で底が見えない深みのある色をしていた。
「魔法はそこまで求めちゃいない。覚悟の意味を求めているのよ」
「覚悟の意味？」

「そー、覚悟の意味。覚悟をする経緯を求めているの。魔法は人の一番近くにあって一番遠くに感じちゃうもの。人の夢ともいえるわ。その願望が魔法を作りだすんじゃなくて、願望する理由、そこに魔法が惹かれて発現するの。あくまであっちが主導権を握っているのよ」

「魔法に覚悟の意味を・・・」アラムの魔力が研ぎ澄まされる。

「俺の覚悟の意味は・・・」

さらに魔力量がどんどん増えていく。

「あら、私も少々本気でいかなければいけないわね」

こうして氷の魔族対無謀な青年の図式が出来るわけである。

――――――――――――――――――――

「端から見れば氷の魔族対無謀な青年だよね、あれ」

「馬鹿いえ、ただの中ボス戦だろ」

第二話：覚悟ってご存知ですか（後書き）

何とか週一又は週二ペースを守っていけたらと思います

第三話：つながり（前書き）

文才を・・・

第三話：つながり

アラム達がいる第七魔法練習場に一人の女性が訪れる。お嬢様ともいえる恰好で何とも気品があるように見える。
「貴方達、お仕事ですわ」
特訓は終わったのか四人で談笑をしていたのだが”お嬢様”にきずくとそそくさとその元へと寄る。
「対中距離戦型との特訓は上手くいきましたの？」
「全然。実践ではまだかなー」
「・・・五月蝿い！」
拳が飛ぶがアクアは受け止める。
「あら、私は事実を言ったまでよ」
一色触発となったが、先程特訓を見ていた人達が止めにはいる。
「アラム、易々と挑発に乗るな」
「龍鵺（たつや）っ！」
「ほらほら、アクアも挑発しない」
「神虎（かみこ）っ！」
これはこれで面白いな、と二人は思う。
「コントはいいから早く参りますわよ」
「？、なんか良いことでもあった？」
「ええ、なんせ今回の任務の作戦指揮はＪＥＮＥＲＡＲＵなのですわ」
「「「「何ぃぃぃぃぃ」」」」
その場にいた全員が驚いた。そして瞬く間に歓喜へと変わる。
「ＪＥＮＥＲＡＲＵってあのＪＥＮＥＲＡＲＵ？」
「すごーい、誰が来てるの？」
「ＪＥＮＥＲＡＲＵの人と一緒に仕事が出来るのって俺達凄くないか？」
「これで私たちも頑張れば本部勤務になるんじゃ！？」

「そうですわ、ＪＥＮＥＲＡＲＵ様とお仕事が出来るだけではなくＪＥＮＥＲＡＲＵ様のお目に止まれば私達は本部勤務となることができるかもしれないですわ」
「一石二鳥だね」
「そうですわ、ですから早く参りましょう」
五人は歩いてく。心胸躍らせて。

―――――――――――――――

「皆揃ったのかな？」
「岸谷支部長、全員揃いました」
うん、そうかい。適当に相槌を打っといて周りを改めて見渡す。いやー、壮観。この一言に尽きるね、こりゃ。
「君達の任務はＪＥＮＥＲＡＲＵのお手伝い。選んだ理由は若さ。まっ、詳しくは本人達に聞いてよ」
そういって黒真はＪＥＮＥＲＡＲＵを呼ぶ。
入ってきたのはモデル体型のクール＆ａｍｐ；ビューティーと養女体型の誰でも振り向く美女。
「このお二人さんがＪＥＮＥＲＡＲＵの華月司とユネット・スノウだよ」

―――――――――――――――

人は等しく馬鹿である。
誰も自分の罪に気づくことは出来ない。罪を犯したことも気づけない。所詮人は人なのである。

何故人は罪に囚われるのだろうか。人を罰することに確執があるのかもしれない。が、所詮人は人なのである。
世界という枠から抜け出せないモノなのである。

第四話：それぞれ（前書き）

十日ぶりの更新！

第四話：それぞれ

英雄がデスクにつくと同時に私の朝が始まる。私の中には一日という概念がないのでこれを朝と決めている。いつも通り指示にしたがい仕事をする。何の変哲のない私の朝だ。朝を迎えることに別段気にしてはいないが今日は何故か物思いに耽っていた。

「よ、なんか元気なさそうだけどなんかあった？」

同僚が心配そうに話し掛けてきたが空気を読んでほしかった。

「大丈夫だよ」

適当にあしらっておくのが一番だと思い軽く受け流す。

「そう、それならいいんだけど・・・　あ、そうそう知ってる？アフリカ支部かなり攻め込まれているらしいわよ」

あ、本題はそっちね、と自分の健康の心配はどうでもいいと思われていたことにショックを覚えつつ、

「アフリカ第一一七五支部、一一七八支部、一一七九支部陥落の件だね」

「アフリカにはＳＰＥＣＩＡＬＳが計十三人いて更にあの銀獣（シルバービースト）さんがいるのに」

「”血染めの聖母”にやられたらしいよ」

血染めの聖母。反魔法協会アウトの幹部にあたるＪＥＮＥＲＡＲＵのＮｏ．６、その聖母のような容姿と戦いの後は必ず服が真っ赤になっていることからつけられた異名。

「血染めの聖母、か。憧れてるのになぁ」

「ええ！？あんな恐そうな異名の人に？」

「だって聖母って言われるような人だよ。絶対綺麗に決まってるって」

異名の前半は無視ですか。まあ、それは置いといて

「異名はあちらが流しているので本当かどうかはわからないよ」

魔法協会アジア第八六六支部、新技術開発課のあるパソコンの前で

他愛のない会話が続いていた。

―――――――――――――――

「博士、実験の結果が出ました」
「ウム、そうか」
私は博士にデータを渡した。
データをみると博士は笑った。不敵に。博士の笑いは博士自身を人の子と表示する笑いだった。そして自分自身に対する暗示のようだった。
「ブーーーーーーン　ブーーーーーーン」
警報が鳴った。
「何事じゃ」
「それが、何者かがこの基地の敷地内に進入しました」
ここを狙ってくるということは…アウト？
「レーダーで探知できなかったか」
「侵入者は音速以上の速さで近づいていたようです」
「博士どうします？」
音速？…思い当たる節は二人しかいない。そして一人はこんなところまで動くわけがない。ということは
「アレをだすぞ」
アレをだすのか。
「アレですか」
「アレはまだ実践経験を積んでいませんし、精神年齢に僅かながら不安が残ります。もう少し熟成させてからではないと・・・」
「黙れ」

言葉を放つべきなのだか”英雄”の言葉に口を開けることができない。
「今ここが狙われたということはアレのことはもうばれておる。それに敵は”雷轟”の娘じゃろうて。警備兵じゃ相手にならん」
やはり”雷轟”の娘。思う所は同じか。

「この研究の成果をだすのにもいい機会じゃ。そろそろ上の連中も結果を気にしだしておるからの」
確かに最近上は五月蝿くなった。南アメリカに続いてアフリカも攻め込まれているせいかあせり始めたのだろう。
「準備をしろ」
そう言われて私も動く。睨みはともかく首は切られたくないんでね。
”英雄”の宣言に私も言ってみたいと思いながら。
魔法協会アジア第八六六支部、副支部長　奈由他紫稔（なゆたしねん）は動く。

第五話：主（前書き）

サブタイトルいいのうかばん！

第五話：主

魔法協会アジア第八六六支部、新技術開発課ではアレの最終準備に取り掛かっていた。そこに英雄が来た。

「奈由他副支部長、今からお前に”人口特殊魔法発現者”の研究に関する全権利を譲る。拒否は認めん。」

「キリング支部長、あなたはどうされるのですか？」

「わしは奴を止めに行く。真正面から立ち向かえばわしですら負けてしまうが、人口特殊魔法発現者の研究が完成していれば勝てる。だから早く完成さしてくれよ」

「分かりました」

あなたの死の事なんてどうでもいい。人口特殊魔法発現者の事も。もともと新技術開発課の配属も嫌だったし。早くコイツを完成させて戦いに参加する。それだけだ。

今回の獲物はあの女か、へへっ、きれいな女じゃねえか。殺しがいがあるぜ。

男は女に銃口を向ける。そして、引き金を引く。

バアアァン

その音と同時に他の場所からも銃声が鳴り響く。魔法”同調（シンクロ）”。思考、感覚などが共有できる魔法。俺達の魔法では視覚と精神の感応までが限界だがスナイパーには十分だ。

殺せたか確認しようと表に出ようとすると仲間の精神がいきなり途

絶える。
何だ、何が起こった？
―おい。どうした？―
「何でもないわよ。ただの屍となっただけよ」
その瞬間、目の前にはヒトのカタチをした雷がいた。
「そして、あなたもなるわよ」
その瞬間、迎撃部隊は全滅した。

―――――――――――――――――――――

研究所の中にある実験場。そこに司は誘われた。いや、わざと誘いに乗った。この戦争の真相を確かめるために。
「…あなたと会うのは久しぶりですね。キリングさん」
闇から”英雄”キリング・プリークスが現れる。
「そうじゃのう、こんな形で会いたくはなかったがのう」
「あなたが早く隠居してくれればよかったんですがね」
「そうはいかん。まだまだわしは人の憧れになっとかなきゃいかんらしいからのう」
憧れ？どういうこと？
「クレハ・ハーユの計画ですか？」
「フフ、わしも長く生き過ぎた。そろそろ使われる立場にでもなろうかと思っていた矢先にクレハの坊やから誘いが来たんじゃ。」
「それで計画に？」
「そうだ。奴がわしによこした任務は人口特殊魔法発現者の作成。こんな英雄まがいなこと、あなたにしかできないでしょ、と言われたさ」

とんだ皮肉だな。
「計画の内容を教えていただけませんか？」
「敵にか？」
「内容次第では敵じゃなくなりますが？」
「無理じゃな。何か前払いをしてもらわないと」
はあ、と一呼吸して司が放った言葉は
「交渉決裂ですね」
キリングは不敵に笑う。
「最初（ハナ）からする気はなかったと思うがな。昔からお前はそうだった」
「ごり押しできるほど強くなったということですよ」

そして過去に歴史を刻んだ男”英雄”と、未来に歴史を刻む女”纏哀（てんあい）の閃光”の戦いが始まる。

「「…始まったか」」
ここでも戦いが…

「！　合図が来た」
「さて、私たちもそろそろ行きますわよ」
若者たちの戦いも

「我が主」

「キリング・プリークスの」
「もとへと」
「急ぐのだ」
「それが私達」
「”人口特殊魔法発現者(ポーンエンジェル)”の」
「最初の任務」
始まるのだ。

第六話：異人（前書き）

すっごく遅くなりました
スンマセン（＿＿）

第六話：異人

電気がはしる。

私は今日負けるつもりはない。全てにおいて。
キリング・プリークスに負けるつもりはない。
司の体に電気がはしる。

「放電（エレクトリック　ディスチャージ）」
司の手から閃光が放たれる。
カミナリのような動きを見せながら、それはキリングへと向かう。
一瞬の出来事。
だが、キリングは避けようとすらしなかった。
それは”英雄”の意地なのか。

―――――――――――――――――――――

「貴女が・・・ユネット・スノウね」
「そうだとしたら？」
後ろから銃を向け引き金に手をかけながら冷たい声で言い放つ。
が、そんなことは気にせずに女は坦々と喋りはじめる。

「”災厄の夢幻（さいやくのむげん）”。人々に夢を抱かせ幻の如く尻尾を掴ませない。正体を掴んだと思えば、その正体は災い（・・）。人々を地獄へと突き落とす災禍の種。」
”災厄の夢幻”は微塵も動かず黙ったままだ。
「これも運命かしら。私と貴女がこうして見（まみ）えるなんてねえ。」
「そんなに私に会いたくなかったの？」
「まさか、逆にこの機会を創ってくれた神様に感謝だわ、ご都合主義ってこういうときに便利よね。」
何かをしようというそぶりは見せないが、銃は下ろさない。
「私と貴女は対極の存在。光と闇。こんなにわかりやすい対極もそうそうないわよ。」
「それがどうかしたわけ？」
「私達は互いに滅ぼされる運命にあるのよ。ロマンチックだと思わない？」
光と闇。光在るところに必ず闇が在り、闇在るところに必ず光が在り。二つは対極であり、二つは共同体。
「ということは、貴女は”光”ということね。けどどう見ても光っぽくないけど」
「それは偏見よ。光という魔法（ちから）を持つ者が全て清く正しい心を持ち合わせている訳無いし、光は綺麗で真っ直ぐだ、とか思ってる奴らがいるからそんなふうに思われているだけよ。・・・だから」
「・・・！？」
銃を背に向けられて尚、ペラペラと喋りつづける女の雰囲気が変わった。
「だからちょっとくらい狂った光の魔法使いがいたっていいじゃない？」
奈由他紫稔は狂っている。いつも渇いていて、戦いという潤いを欲している。
「いいわ」
だが

「狂ってる人、結構好きだもの」
ユネットも常人ではない。
「ふふ、そうこなくっちゃ」
少なくとも平凡な日常ではなかったと、自信を持って言えるし、自他それを認めている。
「さあ、異人同士狂いましょ？」

第六話：異人（後書き）

なるべく早く次話書きます。

第七話：直感が一番！（前書き）

遅れました（　）

一か月ぶりです

第七話：直感が一番！

雷は掻き消される。
それがどのように掻き消されたのか司にはわからなかった。が、恐怖はしていない。
「・・・どうやったのですか？」
「答えると思うかね？」
「答えると思ったから聞いたのですよ。」
「・・・」
だが、キリングは答えない。
「英雄も落ちぶれましたね。隠し事をしなければ私に勝てないんですか？」
英雄は人々の象徴。正義。故に卑怯な真似をとることは出来ない。
「君のその問い詰め方、母親に似てきておるな」
「話を逸らすことはさせませんよ」
放電をもう一度放つ。
だが、またもや何かによって掻き消される。しかし今度は見逃さない。

何あの魔法!?あんな魔法見たことない。ということはあれが黒真から聞いた・・・
「暗天術式ですか」
キリングさんが答えないなら当たったか・・・

「英雄、キリング・プリークスしか使えない秘術。この秘術により貴方は”英雄”にまでのぼりつめた。けれどもその秘術の正体がそんなものだなんて」
ちょっと落胆。
「天人が使う対魔法使い用の術式。魔法を分解、吸収し、自分の力とする術式らしいですね」
私も文献でしか知らないが３０年前に魔法使いは神と戦争をした。これが所謂”第三次天地大戦”と謂われるものである。因みに”第二次天地大戦”は約５００年前、”第一次天地大戦”は約１０００年前にあった。
我等が魔法使いのお相手”神”は簡単にいえば天人である。
「魔法使いと神は仲が悪い。だが人は違う。それぞれの神々にそれぞれが信仰している。」
「何が言いたいんです？」
「私もその一人にすぎないということだよ」
「神を”信じて”いるんですか？」
「…３０年前、戦争を経験しわかったことがある。神は必要だ」
「神が必要だからこそ殺す。３０年前のあなたの言葉ですよ。それが間違っているというのですか？」
「ああ、その時は神の事を理解しているつもりだった。だが違っていたのだよ、全て。神は我々を見捨てない」
「そう…ですか」

―――――――――――――――

”神が必要だからこそ殺す”　魔法教会ＳＰＥＣＩＡＬＳの当時の？１　キリング・プリークスが第三次天地大戦で開戦演説の際言

い放った言葉。
神は自分たちの信仰心によって創られる。神が自分たちを滅ぼそうとするなら、神を殺して新たに創り直そう、そういう意味が込められた言葉だと聞いた時、倒れそうになった。勝手に創りだした命を勝手な都合で殺し、創りだす。そんなことが許されるのか。このことを言ったのがキリングさんと知ってまた倒れそうになる。

そんな時に母が教えてくれた言葉がある。
”神は敵であって敵にあらず”、
「いい、司。敵と言われたものはすべて排除、なんてお堅い頭になっちゃだめよ。私情を挟まないことも大切だけど堅過ぎるのもダメ。物事の本質を見ることが一番大事なの」
ああ、今のアタシダメダメだ〜
「正解なんて一度道を通らないとわからないんだから不確かな情報から可能性を導くのは直感！やっぱりこれよねぇ」
そうだね、母さん。
あたし貫くよ。

「神は生まれ変わらなければならない」
「殺してでもかね？」
「分からない、けど…」
その瞬間彼女の意志が、強くなる。
迷いが消え、瞳の奥底から炎がメラメラと燃えさかっているようにぎらついている。
「私の大切な人（小さな世界）ぐらい守りたいじゃない！！」

揺らいでいた火の粉が今はっきりと火焔へと変わる。

第七話：直感が一番！（後書き）

最低でも今月中には書きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0725k/

アウトサイダー!!!

2010年10月9日20時11分発行